

## 小学校音楽科におけるタテ線譜を用いた鍵盤ハーモニカの学習について

垣浪 文美香（東京学芸大学附属大泉小学校）

司会：小澤 真弓 書記：中村 真貴（文責）

この研究発表は、タテ線楽譜を用いた鍵盤ハーモニカ学習の実践報告となっている。

垣浪氏は、鍵盤経験者と未経験者との差による授業の進め方に違和感があった。未経験者の苦手な要素として次のように挙げた。

①楽譜が読めない。

②黒板を見て弾く。

苦手意識をなくす為にタテ線譜を用いた授業を平成27年12月から取り入れた。垣浪氏はタテ線楽譜の良循環を次のように挙げた。

① タテ線譜ならば図のように捉える。

②鍵盤の位置も理解し、苦手意識を持たず鍵盤に取り組める。

③自力でタテ線楽譜を見ながら演奏出来る。

④主体的に練習を行う。

⑤出来た喜び、達成感を味わう。

垣浪氏は、平成27年12月からタテ線譜を取り入れた授業を行っているが、特に今年1月に行われた全国公開研究発表会について次のように報告している。

対象の研究発表は2年ふじ組の30名であった。

教材は『四季』より『春』を用いた。

（鍵盤ハーモニカ三部演奏。高音をヴァイオリンパート、中音をヴィオラパート、低音をチェロパート）

垣浪氏は、授業のねらいを 次のように挙げた。

『同じパートの音を互いに聴き、聴き合いな

がら音を合わせることを意識して演奏する』

練習を行っている時に児童からの意見として次のように挙げた。

『合図をして最初の音を揃えよう』、

『伸ばしている音を揃えよう』

『休符と休符後のアウフタクトは、足でリズムを取る』

授業後、他の先生方から、

①タテ線譜は誰にでも読めて分かりやすい。

②合わせるのが目的なので、タテ線譜で音の長さを揃えるのは難しいのでは？という感想があった。

垣浪氏の課題は次のように述べた。

①細かいリズムになると分かりにくいので音符を小さくする工夫が必要。

②タテ線からヨコ線への移行。

③鍵盤ハーモニカの鍵盤幅とタテ線楽譜の幅。

今後は、電子キーボードや電子オルガンも導入して、ビートを作成して取り組んで行きたいと報告した。